

44

魯迅が受けた藤野巖九郎による 解剖学史の講義について

坂井 建雄

順天堂大学医学部

魯迅（本名：周樹人，1881–1936）は、1904（明治37）年9月から仙台医学専門学校で医学を学んで、1年7ヶ月で退学した。その小説「藤野先生」には、藤野巖九郎による授業ノートの添削指導、退学の際に送られた「惜別」の写真などのエピソードが語られている。これらの授業ノートおよび写真は、北京の魯迅博物館に収蔵されており、そのデジタル複製板が2005年暮れに東北大学に供与され、内容の分析が行われている。

小説「藤野先生」では、藤野による解剖学の最初の授業の場面が描かれているが、そこでは日本の解剖学の歴史について話され、さまざまな解剖学書が供覧されたとされている。魯迅が受けた最初の解剖学の授業が、実際にどのようなものであったか、周辺の資料も踏まえて検討した。

仙台医専の1904年の入学式は9月12日に行われ、翌13日の火曜日から授業が始まった。当時の日課表によると、1時間の授業が8時から午前中に4コマ（組織学、化学、物理学、ドイツ語あり、13時からの授業が藤野による解剖学である。解剖学の授業は敷波重次郎と藤野が分担して行われたが、最初の授業担当は藤野であった。授業ノート第1巻では、総論は敷波と藤野、骨学と靭帯学は敷波、筋学は藤野の担当と記されている。最初の授業で行われたとされる解剖学史の講義は、総論に含まれるべきものである。しかし総論のノートにも他のノートにも、解剖学史の内容が残されていない。小説の中の描写が具体的かつ詳細であるだけに、その授業が実際に行われなかったとは考えにくい。

魯迅の前後の仙台医専の解剖学の授業で、解剖学の歴史が教えられていたことが、他の学生の授業ノートから裏付けられている。1901年に仙台医専に入学した斎藤龍祥の授業ノートであり、敷波重次郎が教えた解剖学総論のノートに解剖学の歴史が含まれている。

小説の描写が具体的で詳細なので、魯迅が解剖学の歴史の講義を受けたと考えられること、最初の授業を藤野が担当したこと、3年上の学年では敷波が解剖学の歴史を教えていることから、1904年9月13日午後の解剖学の授業で、藤野が解剖学の歴史を講義した可能性が極めて高いと結論された。

斎藤龍祥のノートに記された敷波の解剖学史では、世界と日本の解剖学の歴史が述べられ、日本については①山脇東洋の蔵志と杉田玄白らによる解体新書から江戸末までの人体解剖、②仙台の木村寿穎による人体解剖、③東京大学における明治2年の美幾女の特志解剖と明治4年以後のミュラーとホフマンに始まる解剖学教育が述べられている。

小説の描写では、藤野は初期から現在に至るまで大小の解剖学書をひと山小脇に抱えてやってきて、その初期のものは糸綴じであり、中国で出版されたものの翻訳も含まれていた。当時の仙台医専に確実に存在したもので糸綴じのものは、前野良沢と杉田玄白らによる『解体新書』5巻、宇田川榛齋の『医範提綱』3巻、田口和美の『解剖攬要』14巻である。中国で出版された翻訳書を複製したものは、イギリスの宣教師ホブソンが中国語で書いた『全体新論』がある。それ以後の日本語の解剖学書としては、奈良坂源一郎の『解剖大全』3巻、今田東の『実用解剖学』3巻、石田喜直の『人体解剖学』5巻が藤野の周辺にあったことが分かっている。